

大平さんのいじりも

櫻田 武

昭和二十四年二月第三次吉田内閣組閣の折、日清紡績前社長宮島清次郎翁に、吉田さんから民間経済人を大蔵大臣に推薦方ご依頼がありました。宮島さんの考えられる方は皆、追放されておられます。そこで私に「誰かお前に案はないか」とのことでした。「民間人ではないが、大蔵次官を勤めあげて広島県から代議士に出た池田勇人という人は如何でしょう」と申し出たところ、すぐ呼んでお会いになり、三時間ほど質問をされ吉田さんに電話をされて、池田大蔵大臣ができました。その時、大臣官房の課長の大平さんが秘書官になられまして、私は初めてお目にかかりました。当時大平さんは三十九歳、無口で飾り気のない誠実なお人柄との印象を受けました。

無愛想な池田大蔵大臣のご存じないところでよくおつとめになるのに感心した私は、木挽町の栄家で酒を酌み交しながら池田さんに、「大平さんはあなたの分に過ぎたる秘書官だ」と申しましたら、「彼の生まれは四国の田舎でな」といわれるので、「竹原の豊田鶴（池田さん生家の酒造業の銘柄）よりましでしょう」といつて笑ったことでした。池田さんも大平さんの将来を考え、昭和二十六年に三月も大平さんを米国に出張させました。大平さんは帰国するとすぐ選挙の準備をして香川県から翌年立候補、一回目で当選されました。庶民性豊かで、誠実なお人柄の故でしょう。昭和三十五年夏、安保騒動で岸内閣が倒れ、七月に池田内閣ができ、大平さんは官房長官になりました。池田内閣は「寛容と忍耐」の姿勢で、三井三池の大ストライキを収めた後、所得倍増十カ年計画を掲げて順調な発足をしましたが、裏方の大平官房長官の苦心は並々ならぬものでした。次いで昭和三十

七年、池田内閣改造で大平さんは外務大臣になられ、一回り幅を広げられた感じでありました。

昭和三十九年は大平さんにとって大変な年であったと思います。私は九月のある日、前尾・大平両氏から「池田総理の病気は癌で、全治は不可能」と承り、早速築地のがんセンターにうかがったところ、人払いをされ、二人だけになった時に「総理の職はひと月もふた月もあけておくべきでない。オリンピックがすんだら辞めようと思うが、どうだろう」と池田さんの方から先に申されました。私は池田さんがこれほど偉くなられたことに感嘆を禁じ得ませんでした。大平さんにそのご報告をし、大平さんは前尾さんとお二人でいろいろご苦心の末、十一月後継者指名が川島・三木・鈴木（善幸）さんを通じて行われました。この年大平さんは、「長男正樹君をうしなわれました。運動も勉強もよくでき、慶応大学でも学友の信望極めて厚く、卒業後も将来を囑望されていましたが、難病に侵されて、急に昇天されました。この折の大平さんの悲嘆は言語に絶するものがあつたようです。稲田（耕作）君や栄家の女将等は「おとつちゃんは大丈夫だろうか」と、われわれに洩らすほどでしたが、大平さんはただ黙ってひたすら耐え続けられました。恐らく年月を経ても消え難い痛手であつたでしょう。大平さんは昭和五十三年暮れに、自民党総裁、第六十八代内閣総理大臣になりました。高度成長が終りオイルショックを受けた日本のあり方は、民間の経済活力を活かして切り抜けるほかはないとして、スモール・ガバメントを唱え、行財政整理を打ち出されました。外交についてもタイミンクのいい行動で日本の地位を高められました。

しかし、昭和五十四年秋の総選挙後の首班指名国会で、同じ党から首相候補が二人立つという前代未聞のことが起こり、そのしこりが五十五年五月の思いもかけぬ内閣不信任案可決となつて現われました。この頃から私は「孤独な大平さん」という感じを禁じ得ません。それだけ責任感に忠実であつたことを思うと、いじらしく思えて涙が出ます。これだけの総理大臣はなかなか出ないのではないのでしょうか。

（日清紡績相談役）